

三多摩医師会報

第47号 昭和51年 8月



鵜
飼

川
合
玉
堂

目 次

医師会日誌	2	各部及び委員会報告	11
時報時論	3	新規購入の会館敷地本登記手続き完了	
最近経験した風疹の神経系合併症の		総務部 福島理事	11
2例について	吉原昭次、他..... 3	医師会館敷地拡張整備資金調達委員会解散	
福生休日診療所一年の歩み その展望		敷地整備委員会(仮称)新設	
西村邦康	5	委員長 福島大寿	11
プロ棋士指導碁会	囲碁部 甲斐武比古	第9回三多摩広報担当連絡会	
胃癌の治療(C.Cより)	湯川文朗	広報部 松原貞一	11
理事会報告	8		

時 報 時 論

最近経験した風疹の神経系合併症の2例について

青梅市立総合病院 小児科

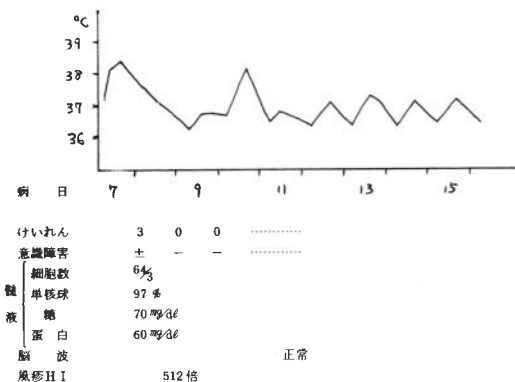
吉 原 昭 次
岡 本 暁 徳
田 村 正 徳

猖獗を窮めた風疹もどうやら終熄に向いつつあります。しかし一時の風と共に燃え立つ残火の炎のように、今なお風疹の患者を診ることがあります。これも盛夏の訪れと共に、熱に弱いピールスのことですから、さしもの流行に終りを告げることでしょう。

史上稀にみる大流行によって、風疹の臨床について多くの医師達は今までにない経験をいたしました。従来は軽い予後のよい小児の伝染病と考えられておりましたが、重症の症例にしばしば出会い、「風疹侮り難し」という声さえ聞かれます。現在厚生省の風疹研究班で重症例の調査集計中であり、その結果の発表が待たれます。

風疹における重大な臨床的問題の一つは、その合併症であります。ご承知のとおり、風疹の合併症は脳炎、紫斑病、関節炎が主なものであります。今回我々は、風疹の神経系合併症を2例経験しましたので報告いたします。

症例 1. 5才10か月 女 風疹による髄膜炎



第1例は5才10か月の女児であります。本年4月2日39℃の発熱と共に発疹が出現しましたが、4日には解熱し、発疹もほとんど消退いたしました。その後は比較的元気でありましたところ、8日朝8時頃テレビを見ている最中に突然全身けいれんがおこり、10分位で一時治まりましたが、近医受診中に再び発作がおこったため当科へ送られて来ました。診察時(9時45分)発熱なく、意識も清明であり、頸部硬直やその他の神経学的徴候もありませんでしたが、腰椎穿刺を行い、細胞数が64%と軽度増加していることが分かりました。髄液採取後30分ほどして、三度目のけいれんがおこり、15分位つづきました。午後2時には38.2℃に発熱し、翌9日の昼頃解熱しました。その後はけいれんも意識障害もなく、4月17日治癒退院しております。この間4月12日の脳波は正常であります。更に5月14日にも脳波を検査いたしました。また4月9日(第8病日)ピールス血清学的検査で風疹のHIは512倍に上昇しておりました。

第2例は8才9か月の男児であります。本年4月9日38.8℃の発熱と共に発疹が出現し、翌10日に解熱しましたが、発疹はむしろ増強しました。13日朝10時頃近医にて受診のため待合室で待っていたところ突然全身けいれんがおこり、直ちに抗けいれん剤などの注射をうけたが止らず、10時30分救急送院されて来ました。来院時意識はほぼ昏睡で、けいれんは継続しておりました。しかも無呼吸の状態呼吸不全著明のため、気管内チューブを挿管し、Bennett MA-I レスピレーターに接続し、人工呼吸を行いました。この間けいれんに対してセルシンの静注が有効でありました。約3時間後に自発呼吸が出現したため、レスピレーターを除去いたしました。その更に2時間後に意識も回復いたしました。そこで腰椎穿刺を行い、細胞数1100%、蛋白140 mg/dlと著明に増加しておりましたが、理学的に髄膜刺激症候群はみとめられませんでした。翌日からは全く意識清明で、終始発熱はみられず、なんらの神経学的徴候をも示さずに4月30日治癒退院いたしました。この間4月14日、22日の脳波はともに後頭部にθ波が比較的多くみられましたが、退院後の5月28日には全く正常化しておりました。なお4月14日(第

6 病日) の風疹の HI は 512 倍、27 日 (第 19 病日) は 1024 倍でありました。

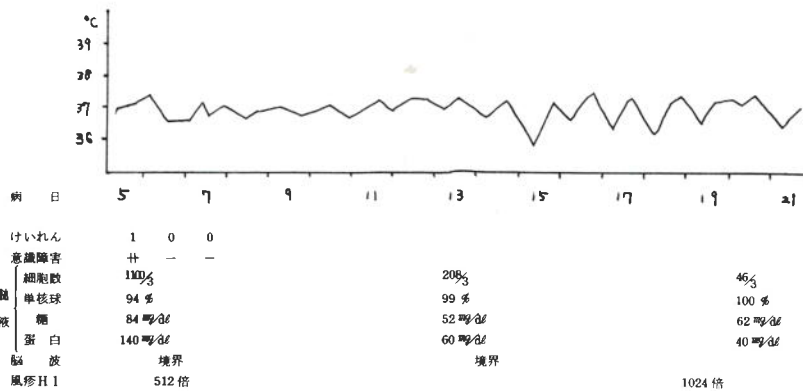
一般に風疹脳炎は 5,000 ~ 6,000 に 1 例の頻度で見られるといわれ、麻疹の場合よりも稀であるとされている。発疹出現後 1 ~ 6 日に、突如としてけいれんなどをもって発症するといわれている。第 1 例は第 7 病日、第 2 例は第 5 病日にそれぞれ突然のけいれんをもって発症しております。

また軽症例であろうと重症例であろうと、大多数の症例は経過が短く、有意な永久的後遺症を残すことは稀であるとされている。第 1 例は髄膜炎型で、髄液を検査してはじめて診断がつけられた

症例であり、第 2 例は脳症型で、激しいけいれんと呼吸不全の状態から生命や後遺症の危険性が懸念された症例であります。いずれも比較的速かに完全な回復をみたことは、患児にとって幸いであり、喜ばしいことであります。

最後に本題をはなれますが、風疹における最大の悲劇は先天性風疹症候群であります。今のところその症例を経験しておりません。しかし、これは時限爆発物と同じように、風疹の流行が終結してから発生して来るのであり、ゆめゆめ油断してはなりません。念のため風疹研究班の先天性風疹症候群診断基準の表を提示しておきましょう。

症例 2. 8才9か月 ♂ 風疹による脳症



先天性風疹症候群診断基準

I 臨床的基準

ウイルス血清学的検査により確認することが必要である。

- A ① 先天性白内障、または緑内障
- ② 先天性心疾患
動脈管開存、肺動脈狭、心室中隔欠損、心房中隔欠損など
- ③ 感音性難聴
- B ① 網膜症
- ② 骨端發育障害像 (XP)
- ③ 低出生時体重
- ④ 血小板減少性紫斑病 (新生児期のもの)
- ⑤ 肝脾腫 (黄疸を伴うもの、あるいは伴わないもの)
- C 小眼球症、角膜混濁、虹彩形成不全

新生児髄膜炎 (非細菌性)

手掌紋異常

小頭症

知能障害 (脳性まひを伴うもの、伴わないもの)

- A 2ツ以上
- A 1ツ + B 2ツ以上 } 先天性風疹が強く疑われる。
- A ② または A ③ + B ①
- C の症状は参考とする。

II ウイルス血清学的基準

1. 風疹ウイルスの分離

新生児-乳児期 鼻咽頭または尿からの分離 (出生児 80%, 6カ月約 20%, 12~18カ月 5%以下)

リンパ球、肝、骨髓、髄液等からは乳児期早期まで、白内障材料からは1歳以上まで分離できる。

2. 抗体検査

a. 6-11カ月乳幼児期における風疹HI抗体の持続。

ただし、周囲の風疹流行がない場合には、幼児期(4歳頃まで)まで拡大しうる。

b. 0-6カ月児における風疹HI抗体価の異

常高値。

6カ月以降に再検して持続を確かめることが望ましい。

c. 血清IgM中の風疹特異抗体の証明。

6-8週まで検査しうる。

注：出生時(遅くとも7日以内)の血清IgM定量で20mg/dl以上は胎内感染(風疹に限らない)を疑う根拠となる。

福生休日診療所1年のあゆみ その展望

福生市 西村 邦 康

昨年7月1日に発足した福生休日診療所も満1年を経過しました。その中間報告的な事は12月の会報に、福生休日診療所の現況についてで山田・官川・西村がそれぞれ報告しております。今回は1年続いたと云う事でその実情を報告し、あわせて2・3の事を申してみたいと思います。まず、過去1年間の実績は表の如くです。

ここにみられる数字は他の休日診療所にみられる数字と大差なく一言で言えば小児救急が多いと云う事です。

前回初歩的な問題点として提起されていた①病院との連携 ②患者の教育 ③診療内容として小児科約束処方の問題 ④管理運営の問題などいくつかの問題点は遅ればせながら福生医師会内に運営委員会が設けられ委員がそれぞれ職務を分担し円滑に運営されつつあります。福生休日診療所が1年大過なく又市内開業医が協力的に業務に参加出来た理由は福生市内にある三病院の絶大な協力によるものと考えています。二次救急を引き受けてくれた事は申すにおよばず、その1例として、我々開業医の出動回数は年3回で、心理的に一番負担を感じるのは年末年始の出動です。この一番負担のかかる時を今回は福生病院・大聖病院がカバーしてくれ一次二次とも引き受けてくれた事です。この事はささいの事のようにもみえますが大変重要な事で、地域医療就中救急医療における病院の役割がいかに重大であることを示唆しています。

以上一年を振りかえって休日診療所の成果をみてみますと事故もなく又大した苦情もなく福生市民のブリミティブな要望に我々医師が答え、地域

社会における医師の役割を果たして来たことと云えます。ここで将来への展望と云う意味で休日診療所に関する2・3の問題を考えてみたいと思います。

今社会では一時鳴りをひそめていた救急医療の問題がここ数ヶ月来やかましく喧伝にされています。一つに木更津のたらいまわし事件をとりあげ「救急たらいまわし訴訟」が起こされて居り又総評は医療の社会化の一環として「救急医療体制確立をもとめる国民会議」を結成しています。これとは立場は異なるのですが政府も救急医療懇談会を発足させ最近 1) 救急医療対策の対象範囲 2) 救急医療機関の体系化とその整備 3) 医療情報システムの在り方 4) 搬送機関と医療機関の提携 5) 救急医療に関する医学教育卒後教育のあり方 6) 住民教育のあり方 7) 費用のあり方 8) 救急医療に関する法的問題 の8項目に問題点をしぼり議論を進めています。これに対し日本医師会は先に配布された文書の通り救急医療体制の問題は先ず世論に冷静に対処して社会的基盤としての地域医療をどのように展開するかについての医療体系を考えずに救急医療を考えるのは不可能であるとはげしく反発しています。このような ①政府の懇談会設置 ②たらいまわし訴訟 ③総評の国民運動 ④日医の批判など一連の救急医療に関する世の中の動きをみますと社会の救急医療に関するみかた或は対応の仕方がここ1年大きく変わって来ていると考えられます。

と申しますのも過去数年来やかましかった日曜無医村、或はジャーナリストが云う医療砂漠の問題は現在では医師の善意により全国の80~90%の市町村でその救急体制が 1) 輪番制 2) テレ

(6)

ホンセンター設置 3) 休日診療所設立、等々なんらかの形で休日診療体制が確立されて問題は表面的には解決されています。即ち現在日本は名目的には休日診療について言えば救急体制は確立されていると云う事です。しかしながら現実にはその中に矛盾がみられ多くの事例が医療サイドから又医療を受ける側からも出されています。そして現在問題の焦点はその休日診療体制或は救急体制が医学的にみて正しく機能しているかと云う事です。換言すれば救急医療の存否が問題であった時代は去り一次救急・二次救急・三次救急の体系化及び整備など質的な事項が問題となって居ると云って良いと思います。

末端の一次救急を担当している福生休日診療所でも以上の観点からみると ①診療内容の充実或は担当医の問題 ②夜間救急診療の問題 ③耳鼻科・眼科・婦人科などの救急の問題などが内包されています。

そのいずれも解決の困難な事項ばかりです。

先般NHKで小児救急医は訴えと云う番組が放映され御覧になった方も多いと思いますが、その中で小児科医は救急診療所に来る患者の中で真に救急患者と云えるものは3割しかいない、多くの救急ではない患者を診なければならないと云う事が救急医療を麻痺させている最大の原因であるとし、世の母親父親の医学常識の涵養をつよくもとめていました。又反対に患者は誤診の問題及び日曜夜間と云えども恒常的な診療体制をとるのは医師の当然の義務と訴えるなど医師側とするどく対立していました。この番組を企画制作した大阪府摂津市の医師会は数年来市民の要望に対応する為当初は輪番制の日曜診療をはじめ、昨年から休日診療所を開設して診療所で休日診療を実施しています。夜間救急診療は独自で行う事は不可能なので近隣の三市と合同し高槻市の夜間救急診療所の中に入り夜間診療を行っているとの事でした。この事例の中に休日診療→救急医療の歴史的発展の図式をみるような気がします。

勿論救急医療体制にかくあらねばならぬと云った固定的なものはないわけで、その地域地域の実情に合った形態が一番よいわけです。その意味では我々の福生休日診療のとった方式は即ち一次救急を内科系・外科系とに機能的に分け、内科系を診療所が担当し必要ならばベッドが確保されてい

る二次収容病院に送り、外科系の救急は一次二次とも二次救急収容病院に依頼したと云う形は良かったと考えます。

しかし将来への展望と云う事を考えますと先に指摘したいいくつかの問題点が浮び上がって来ます。休日診療所も地域医療の中の救急医療の一環であるとする位置づけからみると休日診療を補完するものとして当面夜間救急診療が問題となって来ます。夜間診療は摂津市の例を見るまでもなく我々福生だけで処理出来る問題ではありません。

ここで西多摩地区全般にわたる救急医療体系の確立が望まれるわけです。最後に自分なりに大胆にそのアウトラインを述べれば、①先ず三ブロック毎に一次救急の整備を計る。②二次救急はブロック毎の二次救急施設としてでなく全体の二次収容施設として考え一次救急との連携を充分にすると同時に各病院間の連絡を密にし二次救急の完璧を計る。③夜間救急診療は西多摩に1ヶ所夜間診療所を設立し午前零時まで診療を行う。出動医師は100人～120人位でその任に当る。

以上大変粗雑なプランですが会員の諸先生方の叡智により世の流れに対応する為、より良いプランニングが西多摩医師会の中出来る事を切望してやみません。

プロ棋士指導碁会

今般目出たく五段に昇段されました、おなじみの河合哲之先生をお招きして、7月18日下記の通り指導碁会を催しました。

第1回(前10:30～后0:30)

大蔵氏	4目置いて	18目負
甲斐	5目 "	2目負
桂木先生	5目 "	14目負
丸茂先生	6目 "	1目勝

第2回(后1:00～后3:00)

甲斐	5目置いて	8目勝
桂木先生	5目 "	中押負
丸茂先生	6目 "	中押負
栗原先生	6目 "	6目勝

※ 8月22日(日)午前10時から夏の囲碁大会を開催します。(甲斐)

福生市休日診療所業務状況報告書

昭和50年度

S.51.7.10 研修会資料

月	回数	第一次				第二次				計	従事者				市外患者数			%		
		小児科	内科	その他	小計	投薬	小児科	内科	その他		小計	医師	看護婦	事務員	小計	小児科	内科		第二次	計
7	4	88	30	0	118	90	1	2	0	3	121	4	8	4	16	18	6	0	24	20
8	5	87	52	0	139	107	0	0	0	0	139	5	10	5	20	18	11	0	29	21
9	6	90	33	0	123	109	0	0	0	0	123	6	12	6	24	18	9	0	27	22
10	5	62	27	0	89	77	0	0	0	0	89	5	10	5	20	14	7	0	21	24
11	7	98	42	0	140	116	0	0	0	0	140	7	14	7	28	24	14	0	38	27
12	7	334	158	0	492	63	0	0	0	0	492	7	14	7	28	4	14	0	18	4
1	8	204	239	0	443	85	0	1	0	1	444	8	16	8	32	12	4	0	16	4
2	6	97	46	0	143	111	1	0	0	1	144	6	12	6	24	20	6	0	26	18
3	5	108	47	0	155	142	4	2	0	6	161	5	10	5	20	29	12	1	42	26
計	53	1,168	674	0	1,842	900	6	5	0	11	1,853	53	106	53	212	157	83	1	241	13

昭和51年4.5.6月分

4	5	75	35	0	110	88	0	1	0	1	111	5	10	5	20	21	11	0	32	29
5	7	169	41	0	210	165	0	2	0	2	212	7	14	7	28	43	11	1	55	26
6	4	115	14	0	129	113	2	0	0	2	113	4	8	4	16	26	6	0	32	28
計	16	359	90	0	449	366	2	3	0	5	436	16	32	16	64	90	28	1	119	27
合計	69	1,527	764	0	2,291	1,266	8	8	0	16	2,289	69	138	69	276	247	111	2	360	16

胃 癌 の 治 療

公立阿伎留病院外科

湯 川 文 朗

近年、胃癌の治療成績は向上し、相対5年生存率は、非治療切除例も含めて40%近い値が報告されている。その要因として、レントゲン、内視鏡細胞診などの急速な進歩による早期診断の確立、ならびに外科療法、化学療法、免疫療法の進歩などが挙げられる。とくに外科療法においては、昭和37年来、胃癌取り扱い規約が規定され、リンパ節廓清の問題や切除断端の問題などに関して外科医の新たな認識と注意が、全国レベルで喚起された点も見逃すことができない。

今回は、昭和50年1月から51年4月までに、

公立阿伎留病院外科で手術を行なった24例の胃癌症例を中心に検討を加えた。当科における外科療法としては、早期胃癌も含めて、原則としてR₀手術を施行しており、また、Adjuvant chemotherapyとして、術前、5FU 500mg、5日間、術中、MMC 10mg動注、術後、5FU 250mg、20日を施行している。しかし、治療手術例における再発形式を検討するに、より広範なリンパ節廓清の必要が考えられた。今後とも症例を重ね検討しつつ治療成績の向上をはかりたいと思う。

(6月28日、阿伎留病院カンファランス)

理事会報告

理 事 会 (6 月 23 日)

地区医師会長協議会報告 (会長)

1. 地方医師会の国会議員に対する働きかけについて (印刷配布)
2. 学術講演会並びに、S.51 年度日医医学講座の開催について。
3. S51年度研修事業「講義課程＝保健婦・看護婦科」の実施について
4. S 51 年度患者調査について
厚生省が本年も実施するので協力しよう。
(当地区は 3 医療機関)
5. 全国学校保健・学校医大会の開催について
6. 労災診療費の説明会の開催について

S 51 年 6 月 25 日 (金) 日仏会館にて開催

(会長) 都に於ける他府県分は 8 % である。内 4 % は硅肺で、4・5 月分は査定されるかも知れない、異議があったら直接都へ出す様。

(福島) 先に都医で押した値上げ案は認められなかった。然し両方の云い分を認め、其の差額を調整する事になったと、労災保険医協会総会で聞いたが、其の方法は判らない。説明会で発表するらしいので聞いて来て貰いたい。

(会長) 西多摩病院で出席して報告して貰う様に御願います。

東京青梅病院に指導がある。箱崎先生に立ち会って貰いたい。

来年の参議院選に立候補する福島元埼玉医師会長(全国区)の為三多摩の連絡は朝霞地区の医師会がやる事になり、挨拶がある様です。

以上で会長会議報告が終り、協議事項に入ろうとしたが、西村理事よりの発言で報告事項を先にする事になり、各部の報告に入る。

(学術部報告) (西村)

6 月 2 日部会を開き運営方針を決め、先に委嘱された部員を選び諒解を得た。更に会員で集り、運営方針に従い実行に移す事になり、昨日学術講演会を開催した。青梅総合病院顧問・元東京医大教授(皮膚科)小島先生が、薬疹について話された盛会だった。理事の方々も出席して貰いたい。

学術部部員として次の諸先生が発表された。

東部一東・松田・木野村・小林

西部一平岡・吉野・小沢昌・堀田・市原

南部一菱山・清水・菅井・鈴木・松本・大塚

(公衆衛生部報告) (松原)

今医師会に於て重大なのは、救急医療の問題では災害救急と一般救急に分れる。

災害救急は東京都と都医の間で進んでいる取り決めが、やがて地区医師会と市町村の取り決めと、波及する様に思うが此の方面は官川・箱崎両先生に主体となってやって貰いたい。

一般救急は、夜間診療が問題になるが、休日診療は確立して来たが夜間診療は話題を賑わしている。之について医師会としても問い合わせがあった時に即応出来る様、資料・方針を考えて置く方が良いと思ひ、此の一年間、夜間診療をしている処からアンケートを取り、病院とも接触して二次救急の問題迄考え、西村先生と共に主体となってやる事にした。

6・9 ヶ月児の問題は、昨年末総務部に受持が移った形になっているが、公衆衛生部が主体になった方が良くと思うので、中林・箱崎先生に主体となって貰う事にした。

予防接種で今日聞く処によると、板橋で日脳接種後 2 日で死んだ。予防接種事故と関係あるかどうか問題になっている。流感か何かの潜伏期間中に接種したのではないかと云われているが、予診段階では潜伏期間は判らないし問題になると思う。

老人健診は各地区で様々の方法で実施しているが、西多摩では統一したものでやりたい。

災害救急については官川理事に担当して貰いたい。

(官川) 当面問題になっているのは、災害時の救護活動についての協定である。明日代議員会で締結する予定になっているが之は都と都医の間で、やがて地区医師会と市町村と締結するようになる。

協定書の内容はいろいろあるが大事な事は二つ一つは災害時編成する医療救護班の人員に対する実費の弁償をどうするか。もう一つは救護計画の作成と提出が義務づけられた事。

協定書を締結するのは各地区毎に医師会とですか、西多摩医師会が市町村連合体とするか判らないが、早く締結すべきだと思う。

此の締結に関しいろいろと発言があった。

(瀬戸岡) 少し当って見たが市の当局者は、「予防接種や学校医手当で西多摩医師会と自治体連合会と取り決めたように之もなるのではないか。」と云っている。防災計画は各市町村毎にやっている様だ。

(事務長) 都医に聞いた処、担当理事がいなくて都の衛生局に問い合わせたが、「各医師会で計画しなければならぬが、西多摩は広いから市町村連合体を作って貰い、其の代表と取り決める可きであろう。」との事であった。

(○) 其れは都の意見か。(答) 其の通り

(箱崎) 其れは都の意見で、都に都合の良いものだ、都医の意見はどうだろうか。

(会長) 明日の代議員会の準備会で、松井副会長が、「区は区別に、三多摩でも北多摩の様に市の多い処は個々にやって呉れ、西多摩の様に連合体のある処では其れとでも決めて呉れ。」と云っている。何れにしても細目については公衆衛生部で検討して貰いたい。自治体と話し合って煮つめて呉れ。

(福島) 災害救急は都が10年前から計画して来た。一般救急は休日・夜間診療が実績をあげ、災害救急も医師の身分保障と報酬が決まったものだから急に動き出して来たものだ。昔はどうであったか。

(山田) 三多摩庶務会でもかなり前から取り挙げていた。地区別に計画した場合まちまちで其の保障額の差が出るので問題だった。唯各地区でやっても連携を持たせる様にした。例えば八王子に災害があったら青梅から、福生に起きたら昭島から、或は其の逆と云う様に応援に行く事。今度も此の事は考えねばならない。

(松原) 此の問題も含めて交渉すれば良いのですね。

(会長) 此の事は三多摩の公衆衛生部で検討したら良い。唯自治体が関連して来るから総務部も応援して完成させたら良い。

今迄の処、地区の防災計画では先生方は唯名前が挙げられている位のもの、之からはやる気になっているから折衝してしっかりしたものを決めて貰いたい。

(宮川) 此の保障は災害時のみ適用されるのか。

(福島) 演習の時も適用される。

(松原) 医師会長が災害と認めて呉れる様要請して認められねば適用されない。

(学校医部報告)(速水)

かねて懸案であった幼稚園々長会との話し合いが6月9日此処で行われた。向うは築山(青梅)・長谷川(秋川)・小作(羽村)の3園長、こちらは会長・両副会長・総務部長と私。結論から云うと話し合いはつきませんでした。向うの云い分は、医師会で示す手当の額は多すぎて認められない。こちらは私立なので公立の学校や保育園の様に、園医を押しつけられるのは好まない。との事でした。彼等の考えは、園医は年1回の身体検査を受けるだけのもの、と云うもので、保育園は11万と云うがこちらは年2回、こちらは年1回だから高いと云う事で普段の衛生管理の事は念頭にない。此の考えを変えない限り話し合いはつかないと思う。現在具体的なものとして出ているのは、保育園の11万円、羽村地区の3万円+200円×園児数で、之を叩き台として相談して来ると云う事で別れました。勿論羽村案は医師会としては不充分である事は申しそえました。

(山田) 園長会議があり、各地区で交渉する様になると云う事になったらしいが未だ医師会には返答がない。

(今川) 保育園は年2回とかいっているがそんな事では監査が通らないのではないか。

(瀬戸岡) 彼等は2回なら安い、1回なら高いと云っているが、1年の間1回だけ見れば良いのか、会長案は保育園80~100名位で11万に対し、幼稚園は200名で12万と云っている決して高くない。秋川でも12万出している処があるがそこは間違っていると云う位で話にならない。今日聞いた処によると或る幼稚園では東京の大学病院から頼んで来て貰い始めたそう、金額さえ安ければよいと云う、教育者と云うより利益を追う経営者と云う面が強い。園医を双方で認め決めようとする事すら1人の反対で決まらなかった。

(速水) 羽村地区では今年から園医を園の近くの先生に合意の上で決めた。之も医師会の圧迫によるもので面白くないと云っている。

(今川) 五日市では園医を医師会で決めてくれれば良いですねと云っている。

(会長) 幼稚園が全部会に入っているとは限らない。瑞穂では1箇処だけで、其処は医師会案通りにすると云っておいて、陰で半分寄附する形にして呉れと云って折れた。(笑い)

(瀬戸岡) 秋川では園側で園医を決めても良いのでは、と云う人もあるが、当局では私立でも他の保育園・学校との兼合もあり医師会で決めなければならないのではないか、私立だからと云って勝手に決めなければならぬと云うものではない、と云っている。

(会長) 医師会はあれが最後の案だから、来年3月迄は猶予期間を置き、いろいろと相合い、どうしても相手がのまなければ今度は一切手を引くと云う腹を決めてかゝらなければならない。

他の市町村でやっている託児所でも12万位支払っている。

(福島) 之を議決事項としたい。承認

(百瀬) 園医手当の事は個人的な付き合いでは仲々話がつけ難い、之を医師会でやって呉れるのは結構だが、園医は法的にどの程度やらねばならないか研究して貰いたい。其の範囲がはっきりすれば園長も納得するのではないかと、1年でピシャッと止めないで充分話し合って貰いたい。

(会長) だから其の期限を3月迄とした、園医の仕事は年に1回だけのものではない。

(瀬戸岡) 年に1回だけなら1人幼児初診料900円とし園児数と云う計算で貰い後はかまわないと云う極論も成り立つがそれでは困る。

(保険部報告) (箱崎)

昨日連絡会に行つて来ました。都では国保と組み合わせた公費負担を一本化する事になりました。と資料によって續々説明があり、いろいろ質問応答があった。が結局は資料を読めば判る事、講習会を開き説明して貰う事となり詳細は省略する。

6月29日 講習会 (7月8日に変更)

(福祉部報告) (川崎)

旅行部の国内と国外旅行、モーターリスト協会の秋のドライブの会について説明します。

(百瀬) 9月18(土) 19(日) 20(月) 北海道旅行 費用未定。

ねぶた祭を計画したが半年前から予約しなければならないので今年は見送りました。家族ぐるみの旅行にしたい。

(川崎) 海外旅行は来年1月か2月、4泊5日 バリ島とタイ国の予定。

ドライブ会は10月9(土) 10(日) 11(休) の2泊3日、目的地は蔵王、今回は便乗も認めます。

其の他

(山田) 予防接種法第9条がなくなり定期に自治体で行われる予防接種以外の保障は認められなくなった。個人で予防接種をしている方は注意して貰いたい。

互助会の弔慰金の額を上げたが、火事見舞と家族の見舞金が其のままになっている。之を上げたいが総務に一任して貰いたい。理事会で報告する。

(松原) 予防接種に於て風疹発疹後2週間、家族に患者がいた場合1ヶ月間はやめねばならぬ、之は現在の予診表にはないので書き変えねばならぬ。

(会長) 公衆衛生部で考えて貰いたい。又、先の6・9か月児の問題は、公衆衛生部が主体となり、金の支払は総務でやって貰いたい。

敷地が広がった。残った6坪の問題もケリがつきそうだ。

○慣行料金について

(福島) 6月17日総務部で作った。再診を2種類としたが、簡単なものとは点数で云えば30点位、軽い処置程度のもの・其の他は700円。

診断書も3通りを1種類とし、証明書料は省いた。之は診断書に準ずる事にした。健康診断書料も省き身体検査書料と一緒にした。

(川崎) 診察料の下の時間外5割増しと云うのは何か、いらぬのではないかと。

○保険にはないが時間外から日没迄の事、特別に土曜日は午後は時間外となるから。

○之にこだわる事はない、一種のデモンストレーションだから之でも良いのではないかと。

結局此の慣行料金表は其の儘承認されたが、皆の希望により大きいのを作る事は止め、半紙大の小さなものを作る事になった。

以上で理事会は終了。本日の議決事項次の通り。

○慣行料金の改定

○幼稚園々医手当の問題は、来年3月迄は話し合うが、話し合いがつかぬ時は園医を引きあげる。

○6月29日 国保講習会 (後で7月8日に変更)

(速水 完一)

各部及び委員会報告

新規購入の会館敷地
本登記手続き完了す

昭和51年7月12日会長・両副会長出席し鈴木顧問弁護士立合で残金22,267,200円を小峰氏に支払った。同日鈴木氏作成の書類で北郷事務所を通じ、本登記の手続きを行った。福島理事及び坂元事務員が同行した。

尚、本金額は会長名義、両副会長保証人となり埼玉銀行青梅支店より借り入れたものである。

(総務部 福島)

医師会館敷地拡張整備資金調達委員会
解散 敷地整備委員会(仮称)新設

7月7日の請求明細書提出の時に、又はその他の機会に御覧になった事と思いますが、新しく購入された土地の建造物・立木等が全部撤去されましたので、何と広く、すがすがしく感じられた事でしよう。

定時総会・臨時総会で敷地拡張の計画が承認され、それと同時に敷地拡張整備資金調達委員会が発足し現在に及びましたが、今月中に本登記の運びになりました。高水会長は7月7日、委員会を招集し、現在までの経緯について説明し、同委員会の解散を宣言されました。

討議の結果、新しく購入する土地は主として、駐車場に利用されることになるでしょうが、之に付随して、境界をどうするか、玄関が現在のままでよいか、等の問題があるので、研究のために委員会を新設することになります。又解散した委員会の構成は東・矢ヶ崎・野村脩・近藤・鈴木・丸茂(敬称略) 菱山監事・内山・大橋・江本・川崎・福島(以上理事)でしたが皆様御苦労様でした。

会員の皆様の御英断でこの事業が発足しましたのが立派な結果が生まれることを期待します。

(委員長 福島)

第9回三多摩広報担当連絡会

広報部 松原貞一

三多摩地区の各医師会広報担当者が集って情報や意見を交換する会で、今回は7月15日(木)午後7時より町田医師会館で行われた。今回の主なる議題は「対外広報を如何にするか」ということで、広報を担当する者皆夫々常日頃考えていることでもあり、それだけに意見も長時間となり各地区の代表が一通り述べ終わった時には、時既に10時を廻っており、突き込んだ討論をする余裕がなかったのは甚だ残念であった。元来医師という仕事は、患者個人個人との人間関係を大事にするという意味においてシングル・プレーの職業であり、各個人としてはよく勉強もし責任感も強いが個人的なものに精力を使いすぎるせいか、医療がどうの救急がどうのというような一般的社会的なことについては比較的関心がうすく、ましてやかゝる問題について対外広報を行うなど皆無に等しいのが現実である。一般住民の意見はマスコミを通じて日夜叫ばれ、マスコミの声がいつしか輿論となってしまう、やがてこの輿論を基にして医療体制が作られているというのが現状であり、いつの間にか我々が理想とする医療体制とは思ひもよらぬものが出来上ってしまっている。住民の願望により始められた夜間救急にしても、救急でもない軽症患者に余りにも神経を使い労力と経費を使い過ぎる余り、真に救命が必要な患者に対する配慮がおくれ、トライ廻し事故となって再び住民やマスコミの非難をあびているのが現状である。このような正しい輿論の指導なしに体制作りのみ先走っては、かえって医療は混乱するばかりで医療の質は落ちる一方である。さればとて正しき輿論の指導のため我々は何をなすべきかといわれると、いつものことながらハタと困り、ただただ途方に暮れるばかりである。

昭和51年7月1日発行

発行所 西多摩医師会

東京都青梅市西分3-103

TEL(0428)23-2171(代)

会報編集委員 大河原 周 平林 信隆

松原 貞一 堤 次雄

丸茂三千穂 米山 秀雄

今年も趣向をこらして大好評!!

東洋信販ドクターツアー

信濃路の旅

新宿発12:00→中央高速経由→勝沼ス
スター園→白樺湖→蓼科滝の湯泊 (18:30着予定) **1日目**

ホテル発8:30→蓼科高原→懐古園→
軽井沢D.V→鬼押出→草津泊 (18:10着予定) **2日目**

ホテル発8:30→白根山→長野原→岩
井洞→東松山I.C→関越自動車道経由
→新宿 (16:30着予定) **3日目**

北海道の自然をたずねて

羽田空港集合7:20→千歳空港→野幌
開拓記念館→札幌ビール園→札幌市内
見学→札幌泊

札幌発8:30→定山溪→中山峠→ニセ
コ→ニセコ湯の里D.V→洞爺湖D.V→
洞爺湖泊

洞爺発9:00→昭和新山→オロフレ峠
→登別温泉→白老アイヌ部落→支笏湖
→千歳空港→羽田着 (20:05着予定)

(1、4、8回目のツアーは、
逆コースになります)

今年の夏のさわやかさ……どちらになさいますか

第1回目 7月30日(金)～8月1日(日)
第2回目 8月6日(金)～8月8日(日)
第3回目 8月13日(金)～8月15日(日)
第4回目 8月20日(金)～8月22日(日)
第5回目 8月27日(金)～8月29日(日)
第6回目 10月9日(土)～10月11日(祝)

●定員 30名さま(先着順に受け付けいたします。)
●集合 AM12:00 新宿西口安田生命ビル前
●費用 ご1名さま20,000円(ただし、先生、奥さ
さま。お子さまは、小学生まで10,000円。
個人で行かれますと、全行程、約40,000
円かかります。)

第1回目 7月2日(金)～7月4日(日)
第2回目 7月23日(金)～7月25日(日)
第3回目 8月6日(金)～8月8日(日)
第4回目 8月13日(金)～8月15日(日)
第5回目 8月20日(金)～8月22日(日)
第6回目 9月10日(金)～9月12日(日)
第7回目 9月23日(祝)～9月25日(土)
第8回目 10月9日(土)～10月11日(祝)

●定員 各50名さま(第3回目のみ80名さま。先着順)
●集合 AM7:20 羽田空港日航カウンター前
●費用 先生・奥さま=7万円 他の中学生以上=
=8万円 小学生以下=5万円

●各ツアーのお申し込み、お問合わせは、お早目に担当セールス又は営業所まで。



株式会社

東洋信販

代表取締役・大谷昭雄 設立・昭和24年8月 経営総資本・300億

本社・東京都渋谷区代々木4-27-25 ☎03(379)5111(代)

三多摩第二営業所・東京都福生市熊川字武蔵野1633 ☎0425(52)6341

特集 終戦前後

ザンボアングの思い出

大橋 忠敏

比島回教徒ゲリラの人質事件で近頃しばしば新聞記事に見られるミンダナオ島サンボアングという地名は、私にとっては誠に懐かしい響きをもっている。我々は濁点をつけてザンボアングと書いていたが、大太平洋戦争の敗色が濃くなった昭和19年9月から、この地区の警備の任についた。私は独立混成第51旅団独立歩兵第1大隊の先任軍医であった。大隊は中隊ごとに分散して椰子林の中の民家に駐屯し、はげしい敵の空襲を避けながら陣地構築を急ぎ、跳梁するゲリラと交戦したりの日を送っていた。もう1人の軍医H君は10Kmばかり離れた所の中隊に派遣され、私は大隊本部で陸士出のこわい少佐の大隊長に毎日しごかれながらのんびりやっているらしいH軍医をうらやましく思っていた。

さてお隣の第2大隊では先任軍医がノイローゼで自殺し、1人残っていた軍医が、他方面作戦に派遣される支隊附となって行くことになり、第1大隊から軍医1名を第2大隊に出向させよという旅団命令が来た。大隊長が「本来なら先任のお前を残してH軍医をやる所だが、あれはまだ俺が仕込んでいないから駄目だ。お前はどうかやらよそこに行っても恥をかかない程度の格好がついて来たから、お前が行け」と、鶴の一声で私は第2大隊にとばされた。それは昭和20年2月11日、紀元節の日であった。

第2大隊長は温厚な予備役の大尉で、私を軍医さんと呼び、優遇してくれた。レイテ島の戦況が分らなくなり、ルソン島に敵が上陸しマニラに迫った所で、山下軍司令官が、敵は我が腹中に入れりと云ったというニュースが流されてからは、

全く情報が杜絶してしまった。少なくとも我々には何も知らされなかった。米機の来襲は益々執拗頻繁となり、夜もおちおち眠れない位であった。遂に3月7日、敵の大船団がザンボアング沖に現われたのを、我々は山の上から見た。物すごい艦砲射撃と爆撃が続いたが、1日たち2日たつても敵は一向に上陸して来ない。これはひょっとするとルソン島にでも行く途中で、一寸ちょっかいを出しただけなのではないかと、虫のいいことを考えたが、そうは問屋がおろさなかった。3月10日、陸軍記念日の日、耳を聳する砲爆撃のうちに米軍は上陸を開始した。愈々これで一巻の終りだなど覚悟をきめた。

山の陣地で我が旅団が組織的な戦闘をしたのは2週間だけだった。午前8時に敵は宿営地からトラックで乗りつけ、熾烈な砲爆撃の援護下で、ゆっくり歩いて斜面を登って来る。かなり接近した所で砲爆撃がやむと、タコッポから我が軍の38式歩兵銃と軽機関銃と擲弾筒の射撃が始まる。敵はサッと逃げ下る。そして又砲爆撃。これを繰り返して午後5時になると、敵はトラックに乗って町に帰り、砲爆撃もピタリとやむ。米軍は誠に律気である。夜は決して仕掛けて来ない。だから私の場合、日が暮れると、翌朝までの命は保証つきであった。そこで

今日もまた生きてありけり椰子の月などと手帳に書きとめ、今日1日の無事を謝し、明日もまたお守り下さいと祈った。日頃無信心の私が祈りの対象としたのは、死んだ祖父母と靖国の神となった従兄とであった。こうして私が塹壕の中で休んでいる間にも、小人数の斬込み隊が毎夜敵陣目ざして山を下りて行った。しかし敵は多数の軍用犬と聴音器を配備していて、怪しいと思った方向にメチャクチャに射撃を浴びせて来るので、接近することも困難で、戦果はあがらなかった。大隊長は自ら相当数の兵をひきいて敵陣に乗

(2)

り込む決意をした。私は同行を申し出たが、大隊長は笑って、「まあ軍医さんは留守番して下さい」といった。私は肅々と山を下りて行く一行を見送った。翌朝、大隊副官以下かなりの数の兵隊が山に帰って来たが、大隊長の姿はなかった。

旅団副官が後任大隊長となって来た。予備役の大尉で世馴れた人だった。無理はせず、持久戦で行こうとの方針で、大隊は後方の険峻な山に陣地を移した。こんな所まで米軍はやって来ないだろうという安堵感があった。所がある日、谷合いに負傷者があって、私が山頂から下りて救護にあたっている最中、兵隊がかけ下りて来て、山頂が敵に占領されましたという。信じられない気持だった。ブルドーザー（というものを我々は知らなかった）で道を切り開いて、戦車が攻め上って来たという。着のみ着のままで帰るべき家を失った形である。更に敵は後方に廻り包囲網が完成しかけているとわかって、旅団は北方へ転進と決し、旅団本部と第1大隊を先頭に落ちのびて行った。第2大隊は殿軍となり、軍医は負傷者をひきいて最後尾をついて来いと、何とも心細い話になった。暗夜に何度か前に行く部隊を見失い、私の拳銃と軍刀、それに衛生兵のゴボウ剣しか武器はない30数名の団だけが置きざりにされたかと、天を仰いで嘆息したりしたが、やっと停止中の本隊に追いつき、西側の稜線上から小銃の射撃を受けながら擲弾筒で前方の敵小部隊を駆逐し、包囲網からの脱出に成功した。第1大隊にいれば、こんな思いはしなかったろうにと思いながら、冷汗をぬぐった。

サンボアング半島の西海岸沿いに、密林の中を北上すること数日。前方にはげしい銃砲声が轟き始めた。舟艇機動で先回りしていた敵に旅団本部と第1大隊が捕捉されて、ほとんど全滅したのである。第2大隊ははるかに遅れていたのが難を免れ、東海岸目ざして山脈の中に入り込んで行った。この時の兵力は300位だったろうか。先頭の兵が山刀でツルや木の枝を切り払って道を作り、そのあとを1列になってノロノロと進む。木の根にすがって山をよじ登り、枝につかまりながら急斜面を下る。これの繰返しで夕方になると、沢の近くで露営する。毎日げい雨が降る。天幕など通してしまって役に立たない。猛獣毒蛇のたぐいはいなかったが、ヒルが我々の血を吸った。ジャ

ングルの中は、食用になる植物は皆無だった。時たま沢のほとりで見かける大トカゲは、鶏肉に似てうまかったが、滅多にありつかなかった。山中の所々に開墾地があり、住民は避難して無人部落になっている所に行き当たると、置きざりにされた米や豚・鶏などの御馳走にありつけることがあった。さらに運がよいと、畑にサツマイモが出来ていたりして、飽食した上に食料を山のように背負って持って行くこともできた。米軍の偵察機が絶えず頭上を飛びかっているし、炊煙を揚げたり芋掘りの現場を発見されたりすると、すぐ討伐隊がやって来て迫撃砲の雨を降らせるので、一カ所に長居は禁物であった。獲物を背負えるだけ背負って、それを食いつなぎながら、次の開墾地を求めて、またジャングルの中を歩くのである。行けども行けども無人部落にぶつからず、食料が底をついた時、一度だけ山を下りて住民のいる部落に強盗に行ったことがある。威嚇射撃で住民を追っ払い、食料をかっぱらって逃げたのだが、早々と米軍が追っかけて来て猛射を浴びせられ、命からがら山の中にもぐりこんだ。

逃避行に入って間もなく、薬品も包帯材料もなくなり、患者が出て形ばかり脈をとり聴診器をあてるだけで見殺しにするほかなかった。メスは持っていたので、沢の水で洗って無麻酔で膿瘍の切開をした位のものである。シラミと疥癬にとりつかれ、膿疱だらけとなり、靴はとくに破れてぬぎ捨て、素足にボロ服で、さびついて抜けなくなった軍刀を杖にして、ヨロヨロと歩いている私の姿は、今にして思えば誠に漫画的である。このような状況になると、将校だとして威張ってはいられない。軍医さんだとして甘えてはいられない。みんなひとしく唯の人間である。全身これ食慾以外の何物でもない動物であった。体力のある者が生き残り、然らざる者が落伍して行った。落伍者の多くは手榴弾で自決したようである。

かくて約半年が過ぎた。頭上を飛ぶのは米軍機ばかりだが、戦局は一体どうなっているのか。我々が目ざしているダバオの友軍は果して健在なのか、いずれにせよダバオに達する前に飢えて密林の中に果てるのではないかと、心細くなっていた矢先、8月の末に米軍機の撒いたビラを我々は拾った。「親愛なる日本軍將兵諸君、大東亜戦争は不幸にも諸君たちの祖国の敗北に終わりました……」

という書き出しで、投降を勧告するものであった。これは謀略かも知れないということで、出て行かなかった。しかし飛行機が飛ばなくなり、何となく周囲が静かになって戸惑いを感じ始めた9月15日、再び米軍機がビラを撒いて行った。「……米軍の指定する地点に於て武装解除を受けよ。本命令により行動する日本軍は、米軍側は捕虜として取扱うも、帝国政府としては本人帰国後の取扱いは捕虜と認めず。比島派遣軍司令官 陸軍大将 山下奉文」というものだった。大隊長が小野田さんのような人でなくてよかった。これは本物だと判断して、我々は密林を出た。久しぶりに直射日光を浴びたら、それまで苦しんでいた皮膚病がたちまち癒ってしまった。正直な所、助かったという喜びが一杯で、敗戦の悲しみはもう無かった。

思いがけぬ試練がもう一つ、我々を待ちかまえていた。広漠たる湿地帯であった。膝を没する泥濘を、一足ごとに力をふりしぼって足をぬきながら、1日がかりで通過しなければならなかった。ここで何人かの兵が落伍した。口もきけない程に疲れ果ててやっとたどり着いた部落で、我々は食料を手に入れた。一切の調味料と縁が切れて数カ月。始めは歩きながら流れ出る汗をなめて塩味を楽しんでいた。その汗もからくなくなっていた我々は、久しぶりに塩をコッチリきかした食事をむさぼって、露營の夢を結んだ。翌朝集合した一同の顔は見事な浮腫で見違える様になっていた。

米軍の待つ地点に到着したのは10月5日。鉄砲かついだ200余名の一行がゾロゾロと山道を下って行くと、部落の入口に丸腰の黒人兵が2人立っていて、笑顔で煙草をさし出し、我々に1本ずつ取らせた。武器はここに投げ捨てて前進せよという。一列になって歩きながら、その地点でボイと銃や剣を捨てて、武器の山を築いて部落の中に入った。呆気ない武装解除で、御国ぶりを示すやり方であった。此所から高速魚雷艇に乗せられて、海上を走ること約3時間。見覚えのある港に着いたと思ったら、そこはザンボアンガであった。この地をあとにして半年間一生懸命歩いていたのに何たることかと、誠に心外であった。埠頭からトラックに積みこまれて、10分も走ったであろうか、鉄条網に囲まれた収容所の門前に着いた。ここで我々はフンドシまで取ってすっ裸にさせら

れ、ぬいだ衣類はガソリンをかけて燃されてしまった。出征2カ月前に結婚した妻の心をこめたプレゼントで大事に腹に巻いていた千人針も、シラミと共に灰になってしまった。入口で頭から白い粉をぶっかけられた。DDTというものであると、あとで教えられた。それから猿又、ランニングシャツ、作業服上下と編上靴を着けさせられ、鳥打帽みたいな帽子をかぶって、米兵と同じ服装になった。ただ違うのは、両肘、背中、両膝と尻の所にPWの2字が白ペンキで書かれていることだけであった。折りたたみ式のキャンバスベッドを入れた大きなテントの立ち並ぶ捕虜収容所の生活が始まった。ここで、第1大隊の生存者は30名、H軍医以下衛生下士官・兵は全員戦死と知らされた。運命的決定を下してくれたあの大隊長も戦死であった。

フィリピンの青い海、緑の島、椰子の葉かげにまたたく南十字星は、戦塵のさ中に見ても美しかった。多くの人々が非業の死をとげて、あの悲惨な戦いは終わった。平和の有難さ、尊さをつくづく感じながら、私は生き永らえている。合掌。

終戦のころ

後 藤 伸

終戦の玉音放送を京城帝国大学本部前に整列して聴いた。医学部二年生だった。じりじりと汗が流れ蟬の音が痛い程に沁みだ。若い方の配属将校が今にも倒れそうだった。

そのほぼ一週間位前か、ソ連参戦の報が知らされた時の方がショックだった。明日にも大学の兵器庫の銃を渡されて、既に決まって居る北鮮興南の歩兵部隊に行き、日ソ国境あたりでパンパンと何発か撃って死ぬものと覚悟した。最期までにっこり笑って居てやろうと思った。既に兄三人は召集され、九州の田舎の家に独り居る母からの便りも時に2~3週間かかって届く様になって居た。先輩の医院を手伝い乍ら寄宿させて貰って居たがヤミ米を買わぬそのクリスチャンの家の食事は乏しく、空腹を抑えて登学する日々だった。

ソ連参戦後講義は無く、毎日防空壕掘りだった。その前から空襲に備えて学生当直が交替で週1回

(4)

位あり小さい糖パン6個が支給された。たまたま終戦前夜は当直で、一緒に泊った友人の一人は、若し敗けたら切腹して死ぬと云っていた。「若し敗けたら」と云う言葉は禁句だった。予想される死ぬ日のことを考えぬ訳には行かなかったが、敗けることは考えまいと努めた。その友人は切腹はしなかった。

終戦の翌日から様々な食糧がどっと街に出た。今迄配給で列の出来た道端で米の量り売りが見られた。何れも目の玉の飛び出る程の高値だった。内地人の家でも非常用の罐詰など空け、飢えについては少しく明るくなった。その頃、着のみ着のままの北鮮出邦人が続々と京城に到着、日本人小学校に收容された。連日官公署の書類を焼く煙が立ち昇った。郊外で日本人の人が襲われた。柔道部の誰某が殺された等の噂を聞いた。誰がどうして居るのか判らなかつた。粗末な紙や布に党名やスローガンを掲げた数人から数十人の群が幾組もデモって居た。京城府内だけで二三日の内に数十の政党や結社が出来たことだろう。それまでわれわれ内地人は見たことも無かつた韓国国旗が終戦翌日から多数見られたことも不思議だった。市内電車は疎らになり日本人が乗ることは段々危険に思われた。自転車で大学に行くと各教室共数人の先輩が整理に出て来ているもののがつかぬ態だった。何れ米軍が来て大学は接收され、内地人は皆日本に引き揚げることは判っているが、何時、どの様にしてと云うことは全く判らなかつた。左程親しくもなかつた先輩がラウベルやスパルテホルツを惜し気もなく呉れた。戦時下の粗末な印刷の岡嶋解剖しか持たぬ自分には喉から手が出る程欲しいものだった。数日後大事な身の廻り品と共に荷造りして京城駅まで運び送り出したが勿論内地には届かなかつた。釜山で一梱包いくらで処分されたものと後に聞かされた。

終戦後5・6日目頃であつたらうか、私の寄宿して居た先輩家族は、鎮海あたりからヤミ船を雇って帰るとの由で、そそくさと医院を韓国人医師に譲り引き揚げて行った。只一名居た脊椎カリエスの入院患者家族と私は、正規の引き揚げまで今迄の条件で居ても良いと云う約束だった。

移り住んで来た韓国人医師が言った。

「日本はもう駄目だね、再起不能だね。」

「いや、試練です。どうなっていくか判らないけど、戦争で民族が根こそぎ亡びると云うことは無い。何とか立ち直るでしょう。」

「いや、今度は試練ではないよ。とうにもならないよ」

翌日は先ず自分専用の自転車を取り上げられ、著しく行動が不便になった。そして今迄見も知らぬ韓国人の家に居ると云うことが聊か気味悪くなつて来た。

九州の田舎中学から遙々京城帝国大学予科に入学したのは、父が亡くなるまで働き、自分も又生れ、幼少年期を過ごした朝鮮への懐しさの他に、12才年長の長兄が当時京城に居り、そこから通学する経済的理由もあった。その兄も終戦の前年に召集されて家族は引き揚げ、近くに身内は無かつた。

寄宿していた先輩の患者に膿胸の老人があり、代診として週2回肋間穿刺排膿洗滌に行くのも私の仕事だった。勿論医師法違反の筈であるが、無資格の代診が内地でも黙許されて居る頃で咎められることではなかつた。

混乱の中で病人を抱えた邦人家族の不安は如何ばかりであつたらう。主治医引き揚げ後、同居して病人の面倒を見て欲しいと云う患家の申し出は渡りに舟であつた。

軍関係、総督府高官家族は逸早く引き揚げて居るとの噂が流れ、病人優先の一般邦人引き揚げは8月27日とのことだった。そしてその老人家族と共に第1回の中に加えられた。

仁川に上陸した米駐留軍第一陣は混乱を避ける為、竜山の師団が京城府外に撤退するのを待って居た。敗戦まで無疵と云われた朝鮮軍が整然と行動して呉れたことは、在留邦人の不幸を最小に止めた大きな要因であつたらう。

8月25日頃であつたかと思う、京城駅前の広場に一台の戦車が止まりその上に突っ立って若い日本人将校が演説して居た。

「韓国人諸君、独立おめでとう。我々は戦いに敗れた。ここまで我々と共に戦い協力して来て呉れた諸君に何等酬いることの出来ないことを、日本人の一人として詫びる。併し遠い将来に向って、我等両民族は相倚り助け合うことなくして決して発展しない。混乱は尚暫く続くであろう。お互い、艱難に耐えて夫々の祖国再建に努力しよう。」

そして何れの日か、本当に親しみを以て手を握り合える日を期待しよう」

独立萬才、日本人は何も持たずに直ぐ帰れ、なぞと云うデモが日夜行われて居る最中である。拍手は無かった。併し彌次も飛ばなかった。戦車の威嚇の他に、その青年将校の死と対面し続けた重さと真面目さが感じられた。私も又慌しい引き揚げ前で、終りまで聴かず群の後を離れた。戦車は府外へ撤退する途中の一台であったろうか。

8月27日朝5時京城駅前広場に集合。その日は愈々仁川から米軍が京城に入城して来る日だった。夫々長年住み馴れた街に名残りを惜しむ間は無く、感慨に耽る余裕も無かった。それでも、敵軍の姿を見ることなく、その監視下でなく京城を離れられることはせめてもの慰めだった。

全く空襲を受けなかった朝鮮鉄道の引き上げ列車は貨車ではなかった。病人子供だけを坐らせ、三等客車の通路に殆ど立ったまゝだった。ダイヤは乱れ、何でもない小さい駅に長い間停車して居ることもあった。左様な時には引き揚げ者の代表が機関手に、なけなしの身の廻り品から何か持って行った例もあった由、後に聞かされた。真偽の程は明かでない。子供の頃住まっていた町の駅を通った。満州事変に出征通過する部隊を、小学校の先生に伴れられて何回も見送りに出た見憶えのあるプラットホームだった。

当時特急で6時間位の京城釜山間を16時間位かかって、夜半やっとな釜山棧橋に着いた。引揚者で一杯に溢れた駅、棧橋の構内を、ここでは未だ付け剣した銃を担った日本兵が巡邏して居た。頼もしかった。

そしてその晩から暴風雨となり、連絡船興安丸に乗り込むことが出来たのは三日三晩の後だった。

終戦の頃を偲ぶ

戸倉診療所 桂 木 真

当時に想いを馳せて、心の重い筆を執り始めてはみたものの、私には、特に感動を呼び醒ますほどの鮮烈な印象は、とり立てゝは残っていないように思われます。歳月の流れと共に、遠く霞んだ記憶のなせるわざでしょうか。それとも、余り思

い出したくない終戦前後の惨めな環境と世相のためでしょうか。たとえば人生というものが、死に向っての日々の旅路のようなものであるにも拘らず、自分のことになるとその現実をみつめたくない心理。また不快な回想は、出来るだけ忘却の彼方に埋没しておきたい願望。これらがあってこそ人間は虚しさから救われ、それぞれに相応しい生甲斐を見出し、日常の些細な喜怒哀楽に身を委ねて、安堵して生きていられるものなのでしょう。

当時、私は東京から都落ちして熊本医大に在学中で、熊本市の郊外に近い新屋敷町に下宿していました。年令的に云うと、本来なら既に軍医になり、第一線の野戦病院か潜水艦勤務に就いている筈でした。しかし幸か不幸か、旧制高校時代に肋膜炎で休学したり、また「デカタン」的傾向から留年したりして、辛うじて召集を免れていました。若し私の学生生活が順調に進んでいたら、或は戦死していたかも知れません。「人間万事塞翁が馬」——私にとっては実感をもって身に迫る諺です。

それにもう一つの幸運に恵まれていたようです。私の郷里は父方が熊本県の天草、母方が鹿児島県の枕崎で、本籍は天草にありました。そんな関係で、帰省の便などの点から、熊本医大と長崎医大の何れを選ぼうか、と大分迷ったものです。旧制高校・理乙からの二次志望入学ですから、願書さえ提出すれば、何れにでも無試験で入学することが出来ました。あの時、もし長崎医大を選んでいたら、おそらく私は原爆の洗礼を受けていたことでしょう。運命——思えば、あの戦禍を生き延びた人々は総て幸運の星のもとにあった、とも云い得るでしょう。

沖縄が陥落してからの九州地方は、連日のように空襲に見舞われていました。中でも7月上旬、夜半の熊本大空襲は熾烈を極め、市の大半が廃墟と化す惨状でした。「熊本市民の健闘を祈る！」……悲愴なアナウンサーの声。続いて燈火管制下の暗闇に無気味な唸りをあげるサイレン。その時敵機はすでに頭上に殺到していました。防空壕の中で必死に唱える年寄りの念仏。爆音と共に、石油を撒き散らす雨に似た無気味な音。続いて起こる焼夷弾落下の地響き。周囲の異様な明るさに思わず壕を飛び出すと、あたりはもう一面の火の海でした。焔の間をくぐるようにして身辺の人々を誘導しながら、市の中央を流れる百川河畔に退避

(6)

する途中、真赤に焼けたとれた小型焼夷弾を夢中で蹴とばしたことが脳裏に灼きついています。ついに遠撃の味方機は一機も現れず、遙かに散発的な高射砲らしい音が聞こえるのみでした。九州では大都市にせよ、たいして広いとも思われぬ熊本上空を覆っての、約百機の空襲ですから殆ど、「じゅうたん」爆撃に近かったと云えるでしょう。熊本医大は本館の一部を残して大部分が灰塵に帰し、私も下宿を焼け出されました。

その頃は頻りに、また、いたる所で空襲に備えての防火訓練が行われていましたが、これも「新兵器に対する竹槍」と同じ発想でしかなかったようです。要するに、神州不滅を唱えながら、その一方で、一億総玉砕を叫ぶ軍部指導者の最後のあがきに過ぎなかったのでしょう。

国内には、厭戦・反戦の機運が徐々に台頭し、^び瀾漫的に滲透しつつあったように思われます。ミッドウェー沖の壊滅的敗北は、その後半年を経ずして、東京の高校生であった私の耳にすら入っていました。にも拘らず、これを大戦果として糊塗した「大本營発表」は、それ以来次第に、少くとも所謂知識人からは信用を失って行きました。マリアナが占領された頃には、最終的な勝利を信じていると思われる人は、私の周囲には見当たりませんでした。私たちは特高と憲兵を意識し、怖れつつも、悲観的な将来の見通しについて秘かに話し合っていたものです。

米軍の本土上陸作戦も近いと感じられた頃、^{とく}徳富蘇峯の激烈な論文が新聞に載りました。それは半ば公然と軍部を叱責し、暗に降伏への勧告を示唆するものでした。検閲の厳しかった当時のことですから些か奇異に感じられましたが、もはや軍と官憲による言論抑圧の力も徐々に失われつつあったのでしょう。

広島・長崎を襲った得体の知れない新型爆弾のニュースは、おそらくそれが原爆であろうと云うことを、本能的に感知させるものでした。何故なら私は、原子の破壊力に関する知識と、それが世界的に実験を伴う研究段階に入っていることを、既に高校時代に教えられていたからです。マッチ箱大の原子物質で敵の大艦隊と輸送船団を、一瞬の裡に殲滅し得る劃期的新兵器！。私は、日本でも研究中であった筈の此の兵器の、一步早い完成を秘かに期待し、若し神風が吹くとすれば、まさ

にそれのみだ、とさえ思っていました。いずれにせよ、戦闘の概念を根底から覆^{くつが}した原爆投下は、本土決戦を抛棄して無条件降伏にいたった過程の決定的要因となったようです。

そして遂に8月15日を迎えました。炎天のもとに整列して聞いた玉音放送。それは独特の朗読調とラジオの雑音のため聴きとり難いものでした。初めの裡は国民の一層の奮起を促す激励か、と思いました。しかし、それが無条件降伏を告げるものらしい事は、誰の顔を見ても疑う余地がありませんでした。急には特別な感動も湧かず、皆、うつろな目を見合わせて言葉もなく立ちつくしていました。「なるようになった！」「これで全ては終わった！」そして心の片隅に、今夜からは空襲の心配もなく眠れる、と云う安堵感が横たわっていました。

私の家は東京で二度戦災に遭い、家族の半分は天草に疎開していました。その天草で終戦後の初秋を迎えた晴れた或る日のことです。目の前をスイスイと飛び交う赤蜻蛉を眺めながら、私はしみじみと生きている実感を味わっていました。そして、その心の底をかすめてよぎるものは「国破れて山河あり。」という感懐でした。

敗戦前後

一わが青春賛歌一

M. U. 生

不謹慎なテーマだとお叱りをうけるかも知れない。しかし当時、右も左も知らない14才になったばかりの中学2年生の少年に、事態をもっと深刻に受けとめろと言っても無理な話である。いま私が戦争の悲惨さを書くとするれば、それは後でつけ足しになってしまうから御容赦願いたい。たゞ一言、現在の私は極端な右派にも左派にもなり得ないことは事実である。それは、真理と信じて行動したことが実は虚像に過ぎず、それに踊らされていたという体験がわざわざしているのかも知れない。そして当時は陸軍大将を夢みており、終戦後は博士に憧れ？中学4年終了して高校理乙に入ることになる。不思議なことに大臣にだけはなりたいたと思ったことがなかった。今でも一寸金

を使って無理をすれが総理大臣に、ましてや厚生大臣になることなどはいとやさしいことと自信があるのであるが、なりたいと思わないからならない。それは、父が私の小さい頃から政治家の悪口ばかり言っているのを聞いていたせいかも知れない。まさか中学2年生をとっつかまえて、節操がなさすぎると叱られるおそれもないと思って、本当のことを告白したまでのことである。

30年の歳月は記憶を薄め体験を空白にしてしまっている。思い出そうとして蘇る記憶を潜在意識というが、努力してもどうしても埋めることのできない空白が残るのはどうしたことだろう。フロイドの言うように自分に不都合な不愉快な思い出は全く忘却の彼方におしやられているのであろうか。とすれば今思い出せる終戦前後の記憶は、今や懐古的な思い出として精神構造の中に組み込まれているのかも知れない。それだけ年をとったとも言えるし、物わかりがよくなったとも言えるし、危険なことでもある。思春期の精神構造は、未来志向性のバネで支えられているためにどんなショックも和らげ得るのであろうか。従って、敗戦という強いダメージの記憶は薄い。敗戦前後の思い出は結局青春賛歌になってしまうのである。

終戦の年の冬、丁度中学2年生であったが、姿を見せぬ敵機の警戒警報のサイレンに脅かされながら陸幼の受験勉強を強制的にさせられていた。学校側では学年の数人を集め特訓していたのである。警報がなると防空壕に走り込み、解除になるとまた特訓教室に戻るといった毎日であった。配属将校のいかめしい訓辞、ピンとはねたカイゼルヒゲを一種の畏怖の念で遠くからみつめていたものである。鹿児島市の市立図書館の2階が陸幼の受験場になっており、窓近くに冬枯れの枝をさしのべた桜にまだ蕾がついていなかったのが妙に印象深く記憶に残っている。クラスの同僚と一緒に生活に戻れて嬉しいと思ったのも束の間で近くの駐屯部隊に動員された。通信室の手伝いをしながら終戦を迎えることになるのであるが、時々担任の先生が見廻りに来られるのが待ち遠しかったのをおぼえている。その先生は生物を担当しており、山のアナアナアナで有名な歌奴に似ていて大変面白い人物であった。裏山に数人を集めて、日向ぼっこをしながら、生徒の様子をきいたり、シラミとりをしたり、収穫した獲物の数を競いあったり

したものである。今の中学生にシラミとりをしながら講義?などしようものなら早速PTAの教育ママ達の排斥運動にあい、頭をきられてしまうであろう。幸いに当時はPTAというものもなければQPA (questionable P.A) かも知れぬがあやしげなのはなかった。今から考えると軍事一色にぬりつぶされ勉学と縁遠い生活を余儀なくされている中学生をみて、戦況日一日と不利な状況を知っていて慰めてくれたのかも知れない。30年経た今でも心に残る教師もおれば、全く思い出せない教師もいる。思うに、そのちがいは生徒がその教師をどう受けとめたかにかかっているようである。

私は終戦の玉音放送を聞いた記憶がない。中学低学年だったから学童なみに扱われたのかも知れない。大日本帝国は必ず勝つと信じていたことだけはたしかである。本当に神風が吹くと信じていたのも事実である。改めて偏った精神教育のおそろしさをしみじみ痛感する昨今である。

よく人は生きるために食べるというが、私は恥ずかしくて未だ嘗てその言葉を口にしたことがない。終戦当時は食べるために生きてきたという意識が強く働くからである。東京農工大を出て復員後浪人していた次兄と共に日魯で無線局長をしていた長兄を訪ねる途中、上野駅に着いたときは全く驚いた。地下道には浮浪者がポリポリ体をかきながら近寄って物をねだったり、薄暗い所でつまづいて目を凝らすと、むしろにくるまった浮浪者だったり、自分のリュックを両手が赤くなるほど握りしめて守ったことが昨日のことのように蘇ってくる。その頃奇異に感じたことであるが駅で切符を買うためにお行儀よく並んでいる人達よりも浮浪者達の方がもっと血色がよく数倍も生き生きと見えたのは一体何だったのだろうか。自由の身の立ち直りの早さのせいであろうか。それとも、すべてを失い、も早失うものを持たぬ者、更に最低の社会規範さえも眼中になくなった者の開き直った強さとして映ったのであろうか。

東北線青森行きホームで聞いたやりとりを再現してみよう。「オーイ、切符を持ってるんだ。乗っけてくれ。」「俺は切符なしでも乗っとるぞ、文句あるんか。」「痛い、痛い。」「もうこれ以上は乗れん降りろ、降りろ。」「乗っけてくれ。」「乗ってきたらぶんなぐるぞ。」「ああいよいよ。乗っけてくれるんならぶんなぐられてもいいや。」

(8)

函館の中学に転校してはじめておちついて勉強できた。ノートはなく闇市で買った質の悪いワラバン紙を丁寧に使ったり、殆ど毎日が停電つづきなので、ススがD51なみに出るローソクをともしての勉強だったが楽しかった。ヘッセの車輪の下で喘ぐハンス少年のような悲愴さもなかった。たゞ無心に勉強できることが嬉しかったのである。

雑 草

嶋 崎 省 吾

敗戦後外地より帰還(昭和21年12月)随筆記録と追廻された事もあったが最近はめっきり少くもなり硬骨も手伝い過去の記録も散漫特に戦災により小生の生涯の記録とすべき材料が総て焼失現在は何一つ残るものもなく唯おぼろげなる記憶に便る以外にないのである。

何かまとまったものと思いつつもそれが脳裡に刻まれたものが何処かへ吹飛び我ながら老境の感を深くして居る現在です。想い出の儘走り書をした迄の事、本当に取止めのない事が綴られることと存じます予めそのつもりで御判読いたゞければ幸甚です何が飛出すか自分でもよく判りません。戦前は20才に達すれば必ず徴兵検査なるものが待ち受け其の如何を問わず日本男子たるものゝ務めでもあった。小生もその選に漏れず検査の結果甲種合格の印を捺され兵役の義務につくべく運命づけられた。当時中等学校卒業者は幹部候補生たる資格を与えられ(それ以前は一年志願兵と称す)入隊前に其の手続きをする規定なり。即ち中等学校卒業者は12月1日入隊翌年11月30日除隊高等学校専門学校及び大学卒業者は10ヶ月教育即ち2月1日入隊11月30日除隊の義務づけられた制度でした。小生も後者の部類に属し2月1日の入隊。入隊の際は当然丸坊頭が通例でしたが異例の長髪で入隊したものです(勿論ポマード、櫛も用意して行きました)同時に入隊した者が確た48名でした。24名宛二個班に分れ第一期3ヶ月の教育が開始入隊後一週間も過ぎると如何にも長髪が毎日の訓練で汗臭くなり髪の手入も億劫となり遂に中隊長に断髪式をして貰いさっぱりした事を思い出す。当時内務勤務令に依れば頭は短

特集号 47

く刈る事と云う項目があったが長髪にはいけないと云う項目がなかったものですから命令として断髪させられた事はありませんでした。入隊後上官への申告は通例のことで直属上官たる中隊長、大隊長、聯隊長、旅団長、師団長と順次長髪のまままで申告したものでしたが一度も長髪の件で文句を云われた事はなかった。今考えると自分でもよく通ったものだと思つて苦笑を禁じ得ません。

第一期検閲(2月-4月)も無事終了(最初の一期は各兵科共同教育即ち基礎訓練)5月より軍医、經理は別科教育となり小生等は陸軍病院勤務となり陸軍の医療法規及び軍陣医学の教育及び治療に専念暫して11月30日見習医官(曹長)の階級で満期除隊となる。然して民間に於て病院勤務中陸軍三等軍医任官の辞令を受け将校としての資格を与えられる。爾後陸軍条例改正により三等軍医より陸軍軍医少尉と改名正八位の位記、今考えて見ると入隊中に任官させると任官手当(即ち正装及将校としての仕度金)を支給する事になるので帰宅中の任官であればその支給も省略、自己負担で仕度せざるを得ず其の辺は当時仲々考えての事であったかに想像せらる。当時は平和時代にして一般社会も平穩無事。昭和12年支那事変勃発迄の間に予備役として二度勤務召集(三週間勤務)せられ陸軍病院勤務当時少尉の俸給は1ヶ月70円83銭と記憶して居ります。其の間旅館住居でしたから(旅館一泊3円)結局俸給では足りず自前です。殊に1ヶ月足らずの勤務ですから日割計算で支給された事を思い出します。当時毎年4月から徴兵検査が開始されるので病院の軍医は出張、為に病院の軍医が手薄となるので私達を其の間召集して病院勤務をせしめたものです。

昭和12年7月支那事変が突如として勃発翌8月召集令状(赤紙)が配達此の時程あわてたことはありません。何せ戦地に向うのですから戦時態勢の装備をせねばならず身の廻りは勿論のこと軍刀拳銃将校行李殊に令状を受けてから入隊迄3日間位の余裕しかなく軍刀の用意拳銃は赤羽の兵器廠(拳銃は70円で買った記憶があります)へと昼夜兼行やうと上野駅から乗車して青森県弘前市へ向う。私の所属は第8師団当時司令部は弘前市に在りました此所で〇〇師団を編成小生は第一線部隊である。歩兵〇〇聯隊第二大隊附高級軍医即ち戦時編成は大隊には二名の軍医が配属せられ高級軍医は

乗馬。処が小生は生を此の世に受けてから馬に接した事もなくましてや乗馬なんて夢にも思ったこともなし命令とあればそれも仕方なし(上官の命は即ち朕が命令にして其の如何を問わず絶対服従すべし)部隊編成後検閲が行われたが私は次級軍医を乗馬せしめた処発覚し聯隊長よりえらくしかられたものです。8月中旬軍用列車で弘前を出発奥羽北陸を通り米原を経て広島到着。広島では病院長宅に宿泊当時は出征と云う意味もあって大歓迎を受けた事は今日尚忘れ得ぬ一頁です。二泊後輸送船に依り釜山上陸大邱京城を經由一路北上鴨緑江を渡って愈々北支入り当時朝鮮及支那は広軌鉄道(現在の新幹線と同じ軌道)にして山海関(万里長城起点)を通り豊台に到着下車。豊台より北京入り作戦準備の為1週間北京滞在、余暇を利用して北京市内見学現在の天安門前広場、前門、王府井大街(日本の銀座通り)中南海公園、天壇万寿山(清太后時代の遺物)丘の上に湖水を作り大理石の船を浮べて詩歌饗宴秋の名月を享樂せし豪華絢爛たるものにして昔時をしのぼしむるものなり。建築彫刻の美其他総ゆる面に於て優れたる遺産は歴史の古きを思わしむるものばかりである。短時間に散見したものなれど今尚脳裡に刻み込まれて居る事が物語って居る。交通機関と云っては洋車(人力車)よくこれを利用して市内を飛び廻ったものです。8月下旬行動開始蘆溝橋を渡り(此の橋の欄干には動物の顔面が浮刻りになり数百個あるも各個別々の特異の形を示す)

7月7日支那事変勃発の地十文字山を見た時以外の感に打たれる。此の地で日本軍が演習中支那の軍隊と衝突したのが発端と記憶す。河北省を転戦第一線部隊配属の為戦死傷者が出ると衛生兵を督励して戦火の中その収容に精魂を尽したものである。戦争と云うものが始めての事故砲弾の怖ろしさは全く感ぜず今考えて見ると我ながら不思議の感すらあり次第に慣れて来ると銃砲弾の着弾地を会得、其の偉力の恐ろしさを感じる様になった。民家に傷者を収容、外傷の手当は勿論食事の世話、戦死者は火葬に附して遺骨の収集4-6時中寸暇もなく血だらけの手で握り飯を頬張った事も幾度か火葬迄の経験は終生忘れ得ざるものがある。

河北征伐後第2次作戦として山西省攻略の命を受け太行山脈を横断長時日を要して目的地臨汾に進出(八路軍根拠地)黄河を眼下に見下した時は支那の広

大きに驚く。黄河は黄色の水を波も立てず何千年もの歴史を物語りつゝ静かに流れその河巾は1Kmに及ぶ。昭和12年8月渡支以来足掛け4ヶ年の歳月は夢の間に過ぎ去りほっと一息入れた処で一時的帰還命令に接す。今思い出しても夢心地がする。小生は命令に依り先発要員となり部下十数名を引率臨汾城を出発石家荘を経て北京に立寄り一泊北京料理を満喫今尚その美味さが舌の奥に残る。塘沽より一般乗客と共に乗船(特別室を与えらる)神戸港に上陸三宮駅より大阪、名古屋、東京を經由一路北上弘前着。翌日より部隊の凱旋準備の為多忙を極め部隊を無事迎え昭和15年5月解散。爾後一ヶ月余残務整理の為業務に従事。事故もなく任務を完了せり。以上取り止めのない事を想い出すまゝに走り書きたに過ぎません何卒悪しからず御判読下さい。昭和15年8月再度召集関特演と称して満州へ出陣。之は又後日機会があればと考えて居ります。

八月のよく晴れた青い空

井 沢 良 夫

夏が来て、抜ける様な青空を見上げる度に、私は三十年前のあの八月九日の青空を想いだす。大平洋戦争も末期に近づいた昭和二十年の夏、私は海軍の「短現」(短期現役軍医)を四年ばかり遅れて志願し、海軍々医中尉として佐世保海軍病院の分院である諫早海軍病院に勤務していた。病院は紡績工場か何かを接收して改造した建物であって、丁度改築前の福生病院によく似た環境と、構造を有していた。私はそこで、偶然にも中学校が同窓の東大医学部出身のN中尉と各々隣り合った一病棟を受け持って約三・四十名の患者の治療にあたった。

その日も丁度朝から雲一つない晴天で空は高く青く晴れあがり、どうした訳か連日出っぱなしの空襲警報が、この日にかぎって出ておらず、久し振りに患者の総回診をはじめていた。総回診といっても当時相次ぐ空襲警報のため患者は一寸はなれた山すそに掘ってある防空壕に全員避難させ、寝泊りさせてあったのを病棟の方に呼びもどして、診察するのである。しかも私の病棟は軽症患者が多く診察室にひとりひとり呼びだして行うという

のんびりしたものであった。診療室は改造病院なので、日本間の畳をかたづけ、板の間に椅子・机・ベッドをならべてはあるが、未だ障子はそのままという奇妙な室である。私の「回診」もそろそろ終りに近づき正午少し前の頃であった。丁度病院手伝いのA嬢が私の洗濯物を運んで来て室に入りかけた時であった。突然ピカッとするどい稲妻の様な閃光がひらめいた。それは真昼の稲妻とも形容出来る全く明るい光であり、今迄障子にうつっていた外庭の樹木の影が一瞬かき消される様な明るさであり、何故かその閃光は紫色をおびていた様に思う。A嬢は室の入口で棒立ちとなり、看護婦と患者は「何でしよう」といった顔を私に向けて立ちすくんだ。次の瞬間「ズシン」とも「ドカン」とも、まさに腹にこたえる様な一大音響が家鳴りと共にあたり一面に響き渡った。次いですかさず空襲警報のサイレンが鳴りだした。私はただちに診察を中止、「総員退避」を叫びながら患者達を促して、病棟の前に掘ってある防空壕に飛び込んだ。病院内は一瞬にして静寂を取りもどし、じっと次の第二弾を待ちうけた。どこかで、ちいーと蟬の鳴く声がきこえている。あまりいつまでも静かなので壕の入口に居た私はそっと扉をあけて外をうかがってみた。――

何も変化がない、空をみあげると雲一つない青空の超高々度をB29と思われる飛行機が二機程とんで居るのがみえ、やはり空襲であったなと感じさせた。しかし火災も院内には起った様子もなく、外に出てあたりを見廻すと、丁度諫早駅——福生病院と福生駅位の距離——の方向で一寸煙の様なものがあがっているのが見受けられた。もっともこれはあとで解ったことではあるが、別に何でもなく民家の炊飯の煙であった。

私は部下の衛生兵二名呼んで、院内及駅方面を偵察して来る様に命じた。しかし彼等の報告はいずれも「異常なし」であり、私の駅が爆撃されたいという想定は全くくつがえされた。丁度昼食時となり、第二弾が一向に來ないので、私は一同を壕から出して病棟に帰し、本館の士官室に昼食をとるべく向った。成程院内は何一つ変わったことはない。

諫早病院の昼食は、士官室での会食である。先刻の閃光と爆音について色々意見が交されたが、どうもはっきりしない。たゞその頃になって長崎

市方面の空を真黒な雲のようなものが一面におよび、それはあまり動かず煙の様でもなく、たしかに雲らしいのだが何だか解らない。とにかく長崎市方面に何かあったという事だけはたしかな様である。一同急いで食事をとっているところに主計長の少尉が階段を駆け上って来て次の様な報告を行った。

「長崎市は、敵新型爆弾の攻撃を受け、家屋は概ね倒壊、火災発生し、死傷者多数発生の様、電話線不通のため詳細不明なり」警察電話がかろうじて通じていて、それでやっと判明した情報とのことである。広島が原爆にやられたのが六日、その三日後であったので、むしろ民間の人達はたゞちに原爆を考えたのだろうが、奇妙なことに我々海軍部内では「原爆」の情報が流れておらず、我々も新型爆弾というだけで、あまり原子爆弾などということは考えなかった。それより数ヶ月前の新聞のコラム欄かなんかで、此度角砂糖一ヶ大の爆弾でロンドン市を全滅させることが出来る爆弾が発明されたというのを讀んだ位である。従ってその報告のあとでも、まあ割合とのんびりして病院長のO大佐(私の慶大医学部の先輩)も、「我々のところも救援隊を派遣しなければなるまい、K少佐(皮膚科長)を隊長とし、衛生兵一ヶ分隊、日赤の看護婦一ヶ分隊、それと――」

私は突如私が指名されると思った。前にもものべたように別に「原爆」だからどうのというのではなく、おそらく第二・第三の爆撃が予想される様なところには正直にいつてあまり行きたくはなかった。しかし院長は同窓の先輩でもあり、もう一人のN中尉より私の方が前任でもあり臨床経験もあるので、たゞ何となく私が指名される様な気がしたのである。はたせるかな、「あと中尉は、井沢中尉に行って貰おう」と指名された。しかし、そのおかげといつては何だが、私は全くあとにも先にもない貴重な経験、つまり世界第二番目の原爆の投下直後の長崎市の生々しい姿を、この眼で確かめることが出来たのであった。

私は夏が来て、はれ渡った青空をみあげる度に、きまってあの日の諫早の空もこんなに晴れあがった空だったとの感慨がわき、長崎の原爆のことをつい昨日の様に想い出すのである。

(以下次号)